

新古今歌解 田尻嘉信

—— 宇治の橋姫 ——

○ 家に月五十首歌よませ侍りける時

定家朝臣

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

(巻四 秋歌上)

建久元年九月十三夜、左大将藤原良経の邸で催された「花月百首」の中の一首である。兼実の「玉葉」によれば、当夜は、花・月の二題、各題五十首で密々に披講され、良経、慈円、有家、定家、丹後などが、その面々であった。その後、二十二日にはこれら作者がまた九条邸に参集し、さきの百首の中から各々十首を撰定し、撰政兼実の簾前で歌合に番え、俊成の判で雌雄を決した。「興味尤深」と兼実はいつている。

この「花月百首」を端緒として、建久期は、良経家での催も、定家歌会・歌合・作文和歌会など様々に試みられ、活況を呈した。「新古今集」撰進への道程にあつて、それは、良経の活動の本格化をかなめに、俊成・寂達・定家の御子左家を擁して、九条家歌壇の固成を示した一時期にあたるのである。

後年、家集に「堀河院題百首」を収めるに際しての述懐によれ

ば、定家が、「新儀非抛達磨歌」の批難を蒙っていたのが、ちょうどこの時期になる。一步を先んじた風姿が、世上凡愚に迎えられないのは常のことである。「無名抄」にも、今様姿の新風がこの種の世評にあつたことを叙した部分がある。定家も、やがて伯楽に後鳥羽院を得て世に出ることになるわけである。撰政関白家の御曹司良経とちがって、当代歌壇の師表俊成の嫡流として、将来、専門歌人の誉れをになうべき定家には、風雅への精進にも格別のものがなければならなかつたにちがいない。新しい美意識や表現技巧の模索は、きびしい世評に抗しても不断の努力を必要とした。「花月百首」の出詠も、当然、その意欲に基づいて、期待の新風をもたらしたものと考えたいところである。

○ 「さむしろや」の歌は、「花月百首」の、月五十首の中にある一首である。一読、それが「宇治橋」の名所題によつてゐることは明らかであろう。橋姫の伝説をもとに月光を配して、妖しい、独特の雰囲気をもつた、定家好みの作風を示していることも疑えない。

当時、歌枕、いわゆる歌名所はかなり一般化して、作歌の材となつてゐた。後に「正徹物語」下巻は、

初心の時は、名所の歌が好て詠まるゝ也。それは易くと存する也。我らも歌の詠まれぬ時は名所を読みし也。名所を詠めば、二三句も詞がふさがるもの也。

と述べて、名所題につくことの安易さを指摘している。連想や表現が個々の名所によって固定しきつた中世と、新古今的な世界の模索、精進の時期とは、必ずしも事情が同じでないが、名所題の好尚が、ある場合には、作歌意識にかなりの機縁を供していたことも想像される。「花月百首」の、花・月各五十首にみられる名所題についていえば、

花五十首

良経 吉野山⑦ 高砂尾上④ 志賀山② 初瀬山① 立田山①
高間山① 比良山① 白河①
慈円 吉野山⑨ 志賀山② 白河① 筑波山① 初瀬山① 蝦夷千島①
定家 吉野山① 志賀山①

月五十首

良経 更科、姨捨山③ 清見瀧① 与謝浦① 塩釜浦① 鳴海瀧① 虫明瀬戸① 広沢池① 猿沢池① 吉野山①
慈円 姨捨山② 広沢池① 逢坂園① 吉野山① 清見瀧① 播磨瀧① 浜名橋① 三笠山① 御裳瀧川①
定家 更科、姨捨山① 深草里① 宇治橋① 逢坂関① 越路山①

となっている。

現存の資料の関係で出詠者全員についての調査はできないが、家

集によって良経、慈円、定家の用いた名所題を探れば、右の通りである。各人の詠出歌に共通の名所題があることは明らかであるが、反面、名所題及びその歌数の多寡が、かなりはつきりとみられることは、一層、興味あるものといわなければならないであろう。「花」の吉野・初瀬・志賀、また「月」の更科姨捨・清見瀧・広沢池など、それらはすでに充分、名所題と景物との連想が固定し、一般に膾炙しているものであった。その点では、良経、慈円の名所題のとらえ方には格別の新味があったといえず、概して変化にとほしい感みがある。一概にはいえないが、正徹流の心理のはたらきやすい一面は、良経にもつとも考えられ、慈円とても、定家の作歌意識、ことに職掌ともいえるその濃密な一点に較べれば、さすがに多少の隔りがなかったとはいえない。限られた名所題に、もつとも効果的な役割をはたさせることは、またもつとも定家に望まれるはずのものなのである。

当時、定数歌の試みには、作歌に際して、全体の構成に心を配つての展開配列を意図する風があった。そこに定数歌独自の様式美が求められ、連想による先後の応和、転成におのずからの構成の妙が約されたのであった。「さむしろや」の一首が、その限られた名所題として、「宇治橋」を材に詠まれたことは、従って、まず強烈な作者の個性を想像させるものである。

この一首にいたる一連の作歌展開には、当然、右に述べた定家の用意があったにちがいない。

秋といへば空すむ月をちぎりをきてひかり待ちとる秋の下露

秋をへて心にうかぶ月かげをさながらむすぶやどのまし水

(六五六)

松虫のこゑのまにまにとめくれば草葉の露に月ぞやどれる

(六五七)

あかざりし山井の清水手にくめばしづくも月の影ぞやどれる

(六五八)

深草の里のまがきはあれはてゝ野となる露に月ぞやどれる

(六五九)

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

(六六一)

なにとなくすぎこし秋のかずごとくにのちみる月のあはれとぞな
る (六六一)

感傷を払って、清冽・微妙な自然の姿をうつしとりながら、次第に哀艶交々の幽美な心象に迫ろうとする趣が見事であり、時の流れ、季節の深まりが、一層、それに光彩と陰影とを加えている様子である。そして、六五七に「拾遺集」・藤原為頼の一首、「おぼつかないづこなるらむ虫の音をたづねば草の露やみだれむ」(巻三)を、六五八に「古今集」貫之の離別歌「むすぶ手の」の一首との連繫を考えながら進めば、次の六五九は、「伊勢物語」一二三段にある深草に住む女の影が浮かび、舞台は明らかに物語的な照明をあたえられて来るのである。

そして、次の一首「さむしろや」にいたれば、これが、後述するように「古今集」巻十四、恋四の読人不知歌

さむしろに衣かたしきこよひもやわれを待つらむ宇治の橋姫

に抛りながら、引き続いて前歌との関連で、物語的な幻想の気分を漂わせていることもわかるのである。それは、更に六六一にもうけつがれて、あたかも須磨流謫の光源氏の、孤独と荒涼の明暮からする郷愁の心理が語られるがごとく、深い情趣美の世界がもたらされているのである。

前後の歌順によるこの展開は、すでに述べたように、百首歌として意図された作歌心理の必然性にうらづけられているものであって、この中から一首、「さむしろや」を「新古今集」にとれば、そこでは当然、配列順に問題は生じて来よう。月五十首にある一首の位置がもった独特の意味は、多少とも薄れて来ないわけではない。ただ、この「さむしろや」の歌は、撰集の中にあっても、依然、すぐれた定家の個性を示した一首であり、物語的な幻想の気分や情調を十分に検討されていいものである。この歌の場となった宇治が、それほどに物語的な想念をむすぶのにふさわしいところであったからである。

○ 宇治の歴史は甚だ古い。「鶉路」(記)とも、「菟道」(記)とも記されたが、記録の上で最古の例は、その記紀、応神天皇の条である。近江国への行幸の途次、宇治野を通り、木幡乙女矢河枝姫との邂逅から、御子菟道稚郎子の悲劇が語られている。宇治神社は、別名、離宮八幡といつて、稚郎子を祭神とするが、そこが菟道宮の跡といわれている。この地は元来、飛鳥・大和と近江との交通の要衝にあつていた。「万葉集」額田王の「秋の野にみ草かりふき宿れりし宇治の宮処の仮庵し思ほゆ」、また、人麿の「ものゝぶの八十

氏川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも」など、いずれも旅行にあって、宇治の自然の美しさに感を得たものであった。「蜻蛉日記」にも、京から初瀬詣の途次、この地を通りすぎる描写がある。

しかし、一方では、この洛南の景勝は、王朝貴族の優雅な好尚にない、河原左大臣源融、陽成院、御堂関白道長、宇治関白頼通など、離宮や別業を構えて、四季折々の風情に親しんだ。宇治は貴紳の情趣生活と不可分の関係になっていったが、それに拍車をかけて、文学の面で隆熒する大きな役割をつとめたのが「源氏物語」であった。

紫式部の精細な筆致は、当然、実地の見聞によったにちがいないが、いま宇治八宮の山荘などを詮索することは不可能である。「宇治十帖」仮託の古跡と称する「橋姫之古蹟」以下が散在しているが、その根拠は明らかでない。それは歌の場合でも同様である。たとえば、「古今集」の「いまもかもさき匂ふらむちちばの小鳥がさきのやまぶさの花」(巻二春下 旅人不知)にある「ちちばなの小鳥がさき」は「源氏物語」浮舟巻や「平家物語」宇治川先陣にもでているが、宇治川のどの中洲をさすのか、まずわからない。所詮は現実と交錯する浪漫的な世界であって、抒情の効果をもたらす上での構成要素として、適・不適、あるいは巧拙の問題に帰する点が少なくない。ことに新古今の歌の世界を考える場合に、その感が深いのである。

古来、宇治に材を求めた歌はかなり多い。管見の範囲内でも二百二十余首が数えられ、万葉以降、二十一代集、歌仙歌集などを通じて知られることは、概して中世に入って、諸家の歌数が増えている点である。

万葉集⑧ 古今集④ 古今六帖⑩

新古今集⑧ 長秋詠藻⑦ 拾玉集②③ 秋篠月清集⑧ 拾遺愚草

⑩ 後鳥羽院御集⑩ 壬二集②③ 順徳院御集⑩

大体、以上がその実勢であって、歌の傾向としては、まず、宇治を「憂し」と懸詞に用いる場合と、網代・波・川霧・川風を主題とする場合とがある。「百人一首」にもとられて有名な次の二首は、両者の代表格と云っていい歌である。

わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふなり

(古今集 巻十一 雑下 喜撰)

朝ほらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

(千載集 巻六 冬 定頼)

機知と写実と、この両者、歌柄の相異は、おのずから歌の伝統と修練によって語體的なものをこえ、格段の歌趣に及んでいる。宇治の、歌枕としての知名度よりも、それに材を求める意識の親疎高下が、委細克明の描写を可能とし、景を求めて、時を刻み動きを添え、繊細・適確な表現をもたらしたことになる。

そして、いまひとつの橋姫の伝説となると、知識的に素材の範囲をひろげ、抒情の対象としてのみではなく、そこに作者の浪漫的な憧憬をも託して、詠嘆が示されるのである。前述の「古今集」の歌のあと、さすがに「源氏物語」には橋姫巻・総角巻に橋姫を詠みこんだ歌が一首ずつみえるが、むしろ、それはもつとも新古今的な耽美の世界にかなったものとして、再び姿をみせて来る。発想・措辞・詩的内容に甚だ出色なその歌柄は、中世初頭の複雑な歌人心情との内面的交錯によって導かれたのであった。いわば、その仮構を

主として、そこに性格形成の極をみせた歌の意識が、橋姫のもつ夢幻の神秘感に、妖しい独白を誘われたことにほかならなかった。

○ 定家の歌のほか、「新古今集」には、法印幸清(61巻六)・後鳥羽院(636同上)・慈円(637同上)・隆房(742巻七)の四首が、橋姫を材としている。中で後鳥羽院の歌は、

橋姫のかたしき衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの

と、古今歌の本歌取の一首であるが、「待つ夜むなしき」と時間の経過を加え、「宇治のあけぼの」の新味ある結句の表現に、絵画的に描いた深情がすぐれた歌趣をもたらししている。また慈円の歌の場合、

網代木にいさよふ波の音ふけてひとりやねぬる宇治の橋姫

と、「波の音」に時間の推移を示して、視覚・聴覚に訴えて熟成の歌境をまとめているが、この歌、橋姫に求めながら、人麿の歌を本歌として、旧来、宇治に寄せる伝統の詩情の網代木・波の系列との融合がはかられている点が注目されよう。

この両首は、いずれも巧麗な作歌表現のもたらした新風の本質を示すものであるが、ともにそれが、名所題詠に一期を画した「最勝四天王院障子和歌」からの切入歌であったことは、まことに興味深い。この障子歌の宇治題九首の中の五首が橋姫を材としており、院のほかは、すべて慈円流の融合型の一首構成となっていることは、当代の新風の、複雑・巧緻な技法への好尚を明らかにするものであった。そして、さらに後年、中世に規範視された建保三年の、大規模な「内裏名所百首」の場合がある。その宇治河題、十二

首のうち、一首はさきの融合型であるが、半ばに近い五首が橋姫を詠み、そのうち、定家の歌に重要な役割をはたす「月」が配されるもの四首を数えて、橋姫歌の典型化がうかがわれるといっている。

この時期を頂点として、中世には、すでに出つくした構成要素が、適宜、取捨されて、橋姫歌の後裔をもたらしゆくことになるのである。

○ さて、定家の歌は、前述のように古今歌の本歌取に成るものであった。頭昭は、その「古今集」の読人不知歌について、「袖中抄」第八に奥儀抄云として、次のように述べている。

此歌は橋姫の物語と云物にあり。昔妻二人持りける男、もとのめのつはりして七いろのめを願けり。求に海辺に行て龍王にとられて失にけるを、もとのめ尋歩ける程に、浜辺なる庵に宿りたりけるに、自ら此男にあひにけり。此歌をうたひて海辺より来ける也。さて事の有様云てあくれば失せぬ。この妻なくく帰にけり。今の妻この事を聞きて初のごとく行て此男を待に、又此歌をうたひて(きければ)、我を思出でもとの妻を恋に妬く思て男にとりかゝりければ、男も家も雪などの消ゆるがごとく失にけり。

この歌説話は、いかにも付会された伝奇・荒唐の傾きがあつて、頭昭自身、「私云宇治の橋姫にとりて橋姫の物語は余りにつくりごとく聞ゆ」と評するように、一首の本意を探る上に参考にならうとも思われない。やはり現今の通説のように、その読人不知歌は、待恋の心を詠んだものであろう。宇治に住む女の許へ通うことのでき

ない一夜、待つ身の哀しい心を思いやり、女の独寝の佗び姿を視覚的に描いた一首である。「宇治の橋姫」という特別な呼び方を、窪田空穂氏の『評釈』では、その女の愛称とみ、女の独寝の姿を感動的に眼に描いたのもそれに通うものとされ、その点でこの橋姫は、遊行婦系統の女ではないかとの想像もされている。女の住む宇治の象徴として、宇治橋の存在は重要なものであったにちがいない。

橋姫というからは、当然、橋との浅からぬ縁が想像されるところである。宇治橋付近の岸にわずかに残る石組が、かつての橋姫神社の古跡といわれるが、橋姫は橋の架設にともなつて勧請されたものなのであろうか。

宇治橋の創設は、元興寺の高麗僧道登による大化二年丙午の説（宇治橋断碑・日本書紀異記）と、中国で玄奘三蔵に師事したという道昭説（新日本記・袖中抄）とがあつて定めがたいが、大体、七世紀のころには架設されていたのであろう。「古今集」卷十七・雑上の説人不知歌には次の一首がある。

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば
この歌、「袖中抄」所引のものとは語句の異同がある。二箇所にあるが、橋守はいずれも橋姫になつてゐる。ひとつは、さきの「さむしろに」の歌説話の続きの部分に、「ちはやぶる宇治の橋ひめなれをしぞ云々」とあつて、以下の叙述がある。

是も此事を思て詠るにこそ。彼男もとの妻を忍びたる物なれば、年比なりける人などを橋姫によそへて読るとぞみゆる。ちはやぶるとは彼男女昔の世の事なれば神にて侍りけるにこそは。又万の物にはそのものを守る神あり。いはゆる魂也。され

ば橋を守る神を橋姫とは云とも心得られたり。神は古き物なれば年経たる人によそへるにや。宇治の橋姫とさしたるぞ心得ぬ。神を姫、もりなど云事常の事也。さは姫、たった姫、山姫鳴守、これら皆神也。

この部分は歌説話に較べれば、かなり意の通ずる内容である。神・姫・守などは、みな同じものであつて、万物には魂があるが、それが神であるとしてゐる。これによれば、宇治の橋姫は、橋と別個の存在ではなく、橋の魂として、宇治橋を守る神ということになる。「ちはやぶる」の歌は、いまひとつ別に掲げてあるのでは、第四句が「かなしとは思ふ」となつてゐるが、そこで頭昭は、

宇治の橋姫とは姫大明神とて宇治の橋下におはする神を申にや。其神のもとへ離宮と申神の毎夜通ひ給とて、其婦給時のしるしとて晝殊に宇治川の浪のおびたゞしく立おとのするぞと申伝たる。……隆縁と申侍し僧は、任吉明神の宇治の橋姫を妻として通給し聞の歌也と申き。……住吉は神代よりおはします、年久成て後始て宇治の橋姫に通給と申さん事も覚束なし。但古今注に、又は宇治のはま姫（玉）と注せり。橋の造られたるより先のこととは申人も有ぬべし

と述べてゐる。姫大明神について、後文で頭昭は、「さむしろに」「ちはやぶる」の二首の歌に「ともになかへり」といつてゐるが、右の叙述が極めて伝説的な匂い濃く、殆ど解明の余地がないこと、ことに後半、歌姫の問題を遠く神代まで遡るとなると、一層、その感が深い。さきの「奥儀抄」所引の後段の橋姫観の方が、数等わかりやすく、納得のゆく面をもつてゐるといつていい。

そして、「ちはやぶる」の場合、「袖中抄」の橋姫よりも、一般流布の橋守の方が妥当であって、諸注のように、現実には橋の番人をさしていると思われる。それは、「万葉集」に橋姫がなく「宇治の渡り」(2428 3236 3240)とあることから、「古今集」の説人不知歌の時代には、すでに宇治橋の架設がなされていたとみる方が、恐らく事実に近いと考えられるからである。「延喜式」にも、宇治橋の敷板を近江・丹波から運んだ旨の記録はあり、漸く宇治橋は現実のものとして、姿を現わして来たのであった。

その場合、たとえば、「枕草子」には「せたの橋」「ながらの橋」など、十八橋の名が記されているが、歌に「せたの橋姫」「ながらの橋姫」といったことは、例をみない。守護神の橋姫が無縁のはずはないが、宇治のほかはこの橋姫の表現を聞かないことは、甚だ不思議といわなければならない。贈交しているということならば、「せた」「ながら」の二橋などは、宇治橋に勝るとも劣らないものである。「枕草子」に宇治橋の記述がないことも妙ではあるが、特に宇治橋に限って橋姫をいうのは何によるのであろう。

いま、その根拠を明らかにできる材料は何もない。ただあげるとすれば、やはり往古の歴史にまつわる伝承として、宇治の発端ともいえる菟道宮の存在が、ひとつありそうである。すでに述べた応神天皇と木幡乙女との恋物語、また菟道稚郎子の、後の仁徳、大山守皇子をめぐる悲劇が、古代史特有の、雲上の神秘性、夢幻性を示す伝承として、この地、「ちはやぶる、宇治」に脈々と流れていたことである。それに加えては、急流で知られる宇治川の、自然の勢威・魔力といった面があった。万葉十八首のうち十六首が川である。洪

水などで橋の流亡することは当然であった。「蜻蛉日記」では、舟に牛車を据えて渡河した叙述になっている。橋の守護神としての橋姫に託される靈性は、それらの交錯・交感のうちに現実には根をおろして、往古への郷愁をこめながら、人事と自然との融合を巧みに司るものにはかならなかつた。

往還にも、周圀の風光にとっても、この橋のあるなしは、極めて重要な条件であった。「宇治十帖」にも総角巻・浮舟巻に宇治橋は数回登場する。一二をあげれば

山の方は、霞へだて、寒き洲崎に立てる笠鷹の姿も、所からは、いと、をかしう見ゆるに、宇治橋の、はるばると見渡さるゝに、柴積み舟の、所々に行ちがひたるなど、ほかに目馴れぬ事どものみ取り集めたる所(浮舟)

宇治橋のながき契りは朽ちせじをあやぶむ方に心願ぐは(同)

宇治に舞台を移すことよつて、玉城の地京都とは異つた風光や霧田氣を盛り、物語後半の展開が意図されたのであろうか。

右に抄出した柴舟のくだりは、「新古今集」寂蓮の一首
暮れてゆく春のみなどは知らねども霞に落つる宇治の柴舟

(巻二)
(巻上)

の素地を明らかに髣髴とさせる情景であり、また、「宇治橋のながき契り」とする捉え方も、こと橋姫に関して中々暗示に富む表現といえよう。宇治橋は、たしかに宇治のひとつの焦点をなすものであつた。宇治の橋姫が、橋の守護神として、いわば、宇治橋と表裏一体の靈妙な存在であれば、橋そのものの長い点にも、極めて印象的に詩情をそそるものがあつたにちがいない。定家の橋姫歌を考える

際に、忘れがたい一事である。

○ 定家の「さむしろや」の一首は、まず表現形式の面で、本歌と甚だ対照的である。本歌が、「われを待つらむ宇治の橋姫」と、我、即ち男性の側からの想像をもとに、一人称的な詠出をしているのに対して、定家は、訪れを待つ橋姫の側から、その空しい現実を、客観的に三人称的な詠嘆で示している。

表現内容の面では、さすがに定家の歌は、陰影も深く、屈折の多い、極めて巧緻な一首となっている。季節は秋であり、その夜に風と月とを配して、そこに橋姫の姿を浮き彫りしたのであった。「秋の風ふけて」「月をかたしく」は、ともに定家好みの、感覚的な鋭い表現であって、時間の推移を示唆しながら、視覚的に場面を描き出している。宇治の川風に吹き乱れる黒髪、露添えた衣、そして、皓々とそそぐ月光に映し出される青白い顔など、訪れを待ちわびる哀しい橋姫の独寝の姿態は、鬼気をさえはらんで、極めて幻想的な気分をそそるものである。それは、凄艶と云ってよい程に、ひきしまるような夜気の中に、切々とした余韻をたたえている。いかにも物語的な構想を交えた彫琢の一首といふことができる。

ところで、近代の諸注は、この一首、ことに橋姫をどのように解しているであろう。次に若干の例を掲げてみたい。

①人ヲ待つ夜ノ秋ノ風ガ更ケテ、誰モ来ナイテ狭延ニ宇治ノ橋姫
八月ノ光ヲ片方ニ數イテ丸寝ヲスルコトデアラウ。宇治の橋姫

は宇治橋のほとりに出でたる遊女なり。(鴻巣盛広・新古今集選鏡)

②我を待ちて、宇治の橋姫は、この秋の夜の風も、いよ／＼さび

しく吹き、月影の更け渡る空に、さむしろに独り寝して居るならむか、あはれやといへるにて、秋月秋風ふけ渡るさびしき空に、遊君の我を待ちて、独り寝して居るならむか、さぞさびしかると思ひやりて詠める趣向なり。(塩井正男・新古今集詳解)

③むしろの上に、人待つ夜の秋風がふけて、宇治の橋姫は、月光を浴びつゝ、独り丸寝をしているであろう。宇治の橋姫、こゝは古歌によつて宇治に住む女を指したものであろう。(石田吉貞・新古今集全註解)

④寝延に、男の通つて来るのを待つている秋の夜を、秋風がふけて来て、その蕙を照らす月影の上にひとり寝をしている宇治の橋姫よ。今は橋姫を遊君と見るのに従う。(窪田空穂・完本新古今集評釈)

⑤宇治川の畔に住む遊君(尾上八郎・評釈新古今集)

⑥宇治橋(山城国久世郡)を守るといふ女神(家村文人・新註国文学叢書)

⑦宇治橋のそばにある橋姫明神とも宇治橋のあたりに住む女ともまた遊君だともいふ。(小島吉雄・朝日古典全書)

⑧宇治川のほとりに住む遊女(久松潜一他・日本古典文学大系)

ここにあげた八例で見ると、宇治の橋姫は、遊君5、女1、女神1、決定なし1となつて、遊君と解されている場合がもっとも多い。その中には、窪田空穂氏のように、旧評釈本の女神説を改められた例も含まれている。

しかし、橋姫は、そのように遊君とするのが、もっとも妥当な解釈なのであろうか。「月をかたしく」は、勿論、月光を浴びて独寝

することをさす、橋姫は、その際に「さむしろ」をどの場所に敷いたのであろうか。それは自明というわけなのであろう。諸注釈は一向に触れていない。遊君ならば、橋の上でも、橋の袂でもさしかえのあらうはずはないが、それではいかにも景が現実すぎりる傾きもあるようである。定家が、ことさらに、その甚だ直接的な現実の場面を、本歌に対応する表現形式で女性の側によって描くのを目途としたとは、氣鋭・執心の作風からして、いささかそぐわぬい感がある。むしろ、「源氏物語」橋姫巻あたりに発想のもとを置き、それに本歌にある橋姫の神秘をからませて神人縹渺たる物語的な仮構の創出を意図したとみる方が自然であらう。

橋姫伝説の神秘と夢幻は、橋との一体観にとらえられる橋の守護神、その女神・橋姫の存在にはかならなかつた。いわば、橋そのものが、橋姫なのである。その点、「宇治橋のながき契り」と着目された宇治橋の、その長さは、明らかかな実感をもって、橋の影像をよびおこすのに充分であつたらう。そして、視覚に訴えられた印象的橋そのものが、「さむしろに月をかたして、」姿形を異にした妖艶な化身を虚空に浮かびあがらせるのである。

それが宇治橋の「魂」、あるいは「精」としての女神・橋姫像にほかならない。その夢幻の虚空に橋姫は、男神の訪れを待っている。しかし、熟視しようとすれば、一瞬のうちにかき消えて、眼前には、ただふりそそぐ月光を浴びて、無人の静寂に横たわる宇治橋の情景をみるのである。いわば、定家の橋姫歌は、叙景歌としての見方も、必ずしも不可能でない一面をそなえているといつていいのではなからうか。本歌の恋を四季にかえているのは、本歌取の常道

でもあるが、背後の恋の情趣を暗示するに効果的で、絶妙な幻想と仮構に、景・情の交錯するこの歌の独自性を培っている。そして、「さむしろや」の一首の不思議な魅力が、素材への執心、知巧の技法など様々な要素にあることは明らかであるが、それ以上に、正統的な歌の世界への謹直・一途な点にあつたことを知らなければならぬ。その新風は、正統の自覚の上にもたらされたものであつた。

この橋姫歌の問題は、ひとしおその感を深くさせるようである。定家の宇治の歌十七首の題材は、川波4川長4橋姫2（他に伝定、家卿詠2）川舟2、川風1、川霧1、山蔭1、山びこ1、里人1となつて、やはり「川」の關係が主となっている。新古今と別の橋姫歌は、次の一首である。

をちかたやはるけきみちに雪つもり待つ夜かさなる宇治の橋姫

（文治三年
皇后宮大輔百首）

新古今の秋に対して、冬の歌であるが、ともに「新儀非抛達磨歌」のころの詠であるのが面白い。物語的な詠風のみちびかれた時期があつた。橋姫についても、「ちはやぶる宇治」の伝承を享けつつ、「宇治十帖」には一層魅せられたと想像される。それが四季歌であつたことも、一面物語の描写力に刺戟され、それを歌の新たな課題として抒情表現の可能性を求めた心の反映であり、橋姫は、景・情ともにもっとも適切な素材であつたといえるのである。

（一九六七・二）